

「デジタル連絡帳」活用による家庭・学校連携システムの構築と検証

学校名 京都教育大学附属特別支援学校 学びの会

所在地 〒612-0847
京都市伏見区深草大亀谷大山町90

ホームページ
アドレス <http://tokusi.kyokyo-u.ac.jp>

1 はじめに

特別支援教育において、学校内で教師が指導や支援を展開するだけでは限界があるという視点から、家庭や関連機関との連携に基づくチーム支援が注目されるようになってきている。教育基本法第13条にも「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」とある。特に特別な支援を必要とする子どもの保護者は、子どもの療育へ生涯にわたり携わると共に、子どもの代弁者としての役割も持つため、保護者との連携を効果的に進めることがチーム支援の鍵を握ると言っても過言ではない。

ところが、教師が保護者と協力して支援に携わる関係を構築するのは、簡単なことではない。子どもの捉え方の違いや支援方針の違いから、保護者との間にトラブルが生じ、信頼関係が悪化してしまうといった報告も少なくない。また、意思疎通がうまくいかない理由として、教師は集団の一員としての子どもの動きに注目し、保護者は家庭の中でのひとりの子どもの様子に注目するなど、場面が違えば行動も異なることを、互いに理解し合っていないことも見受けられる。教師はどのように保護者との連携を構築しその協力関係を維持すればよいのだろうか。

そこで本研究では、従来より教師と保護者間でやりとりされてきた「連絡帳」に着目した。従来の「連絡帳」は、日々の子どもの様子を教師や保護者が手書きで記入したものであり、情報交換、情報共有のための一方法として活用されてきたが、そこでは言葉による誤解や、記録時間の制約があること等、限界があることも指摘されている。子どもの実態をより正確に理解し共有するためには、子どもの動きだけでなく、子どもが置かれているまわりの状況（環境や人とのかかわり等）も含めて捉える必要がある。

そこで本研究では、子どもの実態を映像や音声、文字によって記録し、それをタイムリーに情報交換して情報共有する「デジタル連絡帳」の開発を行うことを目的とする。そして「デジタル連絡帳」の記述内容を分析し、既存の手書きによる連絡帳と比較することで評価を行う。この「デジタル連絡帳」の活用により、両者間で子どもの理解をより深め、また協力して支援の方法を探ることができるようになれば、家庭・学校連携システムの一手法として子どもの教育を充実させることができると考える。

2 研究の方法及び内容

「デジタル連絡帳」の開発には、特別支援教育に携わっている現場教師・保護者が協議会を構成し、「仮デジタル連絡帳」を使用した結果を基に、協議会でその問題点、改善点を検討し改良点を加え、修正していく。開発する「デジタル連絡帳」には、映像（動画）・音声・文字を効果的に取り入れ、記録は通信を使って送信し、保護者－教師間で子どもの情報を共有する。

実施には、特別支援学校の保護者（4名）と担任教師（1名）を対象とする。

研究経過は、学会で発表し、指導助言を受け、「デジタル連絡帳」を改善していく。

「デジタル連絡帳」の評価については、「デジタル連絡帳」を使用した場合と、従来の手書きによる連絡帳を使用した場合、それぞれの記述内容を分析し比較することによって検討する。研究の内容は以下の通りである。

(1) 「デジタル連絡帳」の開発

- ①特別支援教育に携わっている現場教師・保護者による協議会を構成
 - ・研究の目的、方法を共通理解する。
- ②「仮デジタル連絡帳」の検討、作成
 - ・文献等調査し、仮デジタル連絡帳を作成する。
- ③「仮デジタル連絡帳」の実施
 - ・実際に「仮デジタル連絡帳」を使用する。
- ④実施結果の検討
 - ・実施した結果から問題点を抽出する。
- ⑤「仮デジタル連絡帳」の改善
 - ・問題点の原因を究明し、改善する。
- ⑥「デジタル連絡帳」の提案
 - ・学会発表し、指導助言をもらう。

(2) 「デジタル連絡帳」の実施

- ①「デジタル連絡帳」の実施
- ②従来の手書きによる連絡帳の実施

(3) 「デジタル連絡帳」の評価

- ①「デジタル連絡帳」と従来の手書きの連絡帳との比較、検討
 - ・それぞれの連絡帳の記述内容について分析し、比較する。
- ②「デジタル連絡帳」についての評価
 - ・「デジタル連絡帳」の効果、今後の課題について検討する。

これらの結果から、「デジタル連絡帳」が家庭と学校における子ども理解をどのように支援していくかについてを明らかにし、また今後どのように活用できるかについて検討する。

3 研究の経過

図1は、「仮デジタル連絡帳」の実施画面である。写真や動画を添付したメールを、PC・携帯電話・スマートフォンを使用して実施した。写真や動画を添付することによって、子どもの学習状況に関する情報を、豊富に正確に伝えられることは明らかである。学習時の子どもの表情、しぐさ、周りの子どもたちの様子、その時に使用した教材・教具や教師の支援の仕方等、言葉で伝えるには限界があった情報を、1枚の写真や動画から伝えることができた。また、従来の連絡帳に写真を添付しようとするれば、デジタルカメラで撮影した後プリントアウトして添付するといった作業が必要であったが、「デジタル連絡帳」ではその添付作業も、画面上で簡単に行うことができる。このように、「デジタル連絡帳」は、子どもの実態や周りの状況、学習環境、支援の仕方といった学習上必要な情報を豊富に、正確に、そして効率的に伝達できるという点で、非常に効果のあることが明らかになった。



図1 「仮デジタル連絡帳」画面

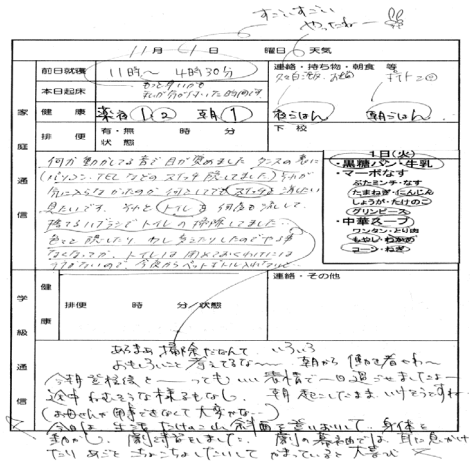


図2 従来の手書きの連絡帳

ところが「仮デジタル連絡帳」を実施していく上で、「仮デジタル連絡帳」には、「連絡帳」の機能の一つである保護者－教師間の意思の疎通、心の通い合い、つまりコミュニケーション・ツールとしての機能が十分に果たせていないのではないかと問題点があがった。手書きの連絡帳では、例えば図2に見られるように、上段に保護者が記述する欄、下段に教師が記述する欄がある。そのため保護者の記述内容に対して、例のように「すごい、すごい。やったね。（上段欄外上）」といった教師の記述が続けてあり、このような両者間での応答の記述内容が多々みられる。ここから、保護者－教師間の心情的な交流を読み取ることができる。このことは「連絡帳」が単なる保護者と教師の事務的連絡手段としてではなく、保護者と教師の信頼関係を築く一助になっていることが伺える。ところが「仮デジタル連絡帳」は、一画面上に一発信という制約があるため、情報を受け取った側は新しい画面を開いて記述していくことになる。そのため受信した内容に対して続けて記述するという内容が実際に減少していた。これでは「連絡帳」の重要な機能が損なわれている。そこでこの問題点を解決するために、保護者－教師の記述内容を同画面上に表示できる方法を取り入れた。

それが、タブレット型コンピューター（Nexus7、iPad）を使用して、インスタント・メッセージの一つである『LINE（NEVER提供）』の利用である。『LINE』は、テキストチャット、ビデオチャット、ボイスチャットが可能であり、タブレット型コンピューターを使用することで、写真や動画、音声を手軽に記録し送ることができる。またその送受信の結果は図3、図4、図5のように継続して表示されていく。この結果、先の「仮デジタル連絡帳」の問題点であった保護者－教師間の応答の記述内容は増加し、応答性が向上し、「デジタル連絡帳」のコミュニケーション・ツールとしての機能が高まった。

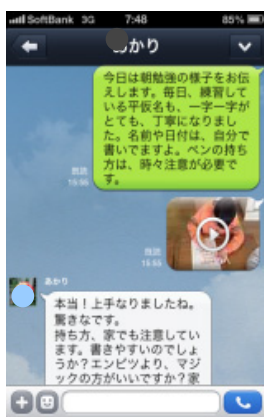


図3 「デジタル連絡帳A」画面

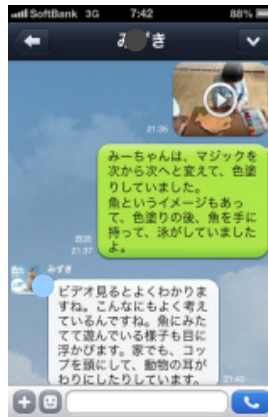


図4 「デジタル連絡帳B」画面



図5 「デジタル連絡帳C」画面

さらに『LINE』は、友だちを追加する機能があり、図5のように保護者4名と教師の計5名のグループ（「森の家（5）」というグループ名）で、同画面を使って情報を共有することが可能である。これを利用し、グループのページでは学級全体に関する伝達内容、個人のページでは個別の指導・支援に関する伝達内容と、両者をうまく活用することで、より情報共有の効果を高めた。

このように「デジタル連絡帳」を実施し、「デジタル連絡帳」と従来の手書きの連絡帳の記述内容を分析（中川, 2013）検討した結果、それぞれのメリットとデメリットは表1のようになった。

4 研究の成果と今後の課題

本研究では、家庭と学校が協力して子どもの支援に携わる関係を構築するための一手法として、「デジタル連絡帳」の開発と評価を試みた。実際に「デジタル連絡帳」の実施を試み、その記述内容を分析・検討した結果、「デジタル連絡帳」は①記述時間の短縮化、②情報の焦点化、③学習環境も含む情報の豊富さ・正確さ、④事実と解釈の明確化、⑤学習状況や指導・支援の公表性、⑥指導・支援の一貫性、⑦全体（学級）と個別の両面性といった効果が得られたといえる。これらの効果は、「デジタル連絡帳」の特質であり、保護者や教師が子どもの指導・支援において大いに活用しうる内容であるといえよう。

一方、「仮デジタル連絡帳」より改善した保護者－教師間の心情的な交流、コミュニケーション・ツールとしての機能に関しては、『LINE』を利用することで、確かな質的改善はみられたものの、その心情的な記述内容をさらに分析していくと、写真や動画（事実）に関する内容（解釈）が中心であり、保護者や教師が子どもに関して内省した内容については記述されにくいといった傾向がみられた。さらに「デジタル連絡帳」は、文字で記述するだけでなく、写真・動画・音声の記録が加わるため、何を記述し、何を記録するかといった記述者の視点が明確にあらわれた。そのため例えば新米教師とベテラン教師とでは、子どもに対する着眼点が違い、「デジタル連絡帳」の記述内容の差異はより顕著になる。心情的な内容も含めて、「連絡帳」として最低限有用な情報は何かのといったことを明らかにし、指導・支援に効果的な情報の選択、検討が必要である。

そこで今後の課題としては、「デジタル連絡帳」のフォーマットの開発が考えられる。誰が記述者になったとしても、子どもに関する最低限有用な情報を網羅して記述できるフォーマットである。このフォーマットの開発が進められれば、記述内容のそれぞれの領域毎に得られた情報を集約し、子どもの生活における成長・発達の実態記録として活用する可能性がでてくる。連絡帳の内容は毎日の子どもに関する生活記録であり、子どもの最も近くにいる保護者と教師から得られる貴重な情報の蓄積である。両者から得られる情報には、それぞれの立場からの視点が含まれており、子どもをより多面的に捉えた情報であるとともに、保護者や教師の指導観や支援方法の特徴までも捉えることができる。これらの情報を集約することができれば、子どもの立体的な生活実態はより正確に把握でき、関与者による子どもへの教育・指導・支援の仕方を明確に提示することも期待できる。「デジタル連絡帳」が子どものよりよい成長を支援する一つの有効なツールとして活用され、延いては家庭・学校連携システムの構築につながるように今後も研究を重ねていきたい。

5 文献

中川宣子（2013）：家庭・学校の連携による教育的ニーズに対応した指導・支援Ⅱ－「連絡帳」の活用－，京都教育大学教育実践紀要 第13号，pp185-191

宮武宏治・高原望・足立由美子（1989）：障害児教育で使用される「連絡帳」に関する調査研究．特殊教育学研究，27（2），pp67-73.

表1 「デジタル連絡帳」と従来の手書きの連絡帳のメリットとデメリット

	メリット	デメリット
デジタル連絡帳	<ul style="list-style-type: none"> ○写真・動画・音声が付録できる。 ○記述時間が短縮される。 ○情報が焦点化されている。 ○写真・動画により、子どもの様子、学習状況を伝えられる。 ○写真等で伝えられる事実を言葉で記述しなくてよい。 ○写真等で伝える事実に対する保護者や教師の解釈が中心に記述されている。 ○事実と解釈が明確になる。 ○保護者－教師両面の同事実に対する解釈が得られる。 ○学習状況や指導・支援の様子が公表される。 ○事前に学習目標や授業目標を具体化する必要性が高まる。 ○複数名（グループ）に一括で情報を伝達できる。 ○全体伝達内容と個別指導・支援内容の区別が明確になる。 ○指導・支援の一貫性が築ける。 ○発達記録、指導・支援記録として活用できる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一方的な情報発信になりやすい。 ○写真・動画に関する記述になりがちである。 ○1日当たりの記述内容項目が減少した。 ○現場では写真・動画・音声の記録に限界がある。（最善場面が記録できない。） ○記述者による内容の個人差がある。 ○デジタル機器使用の得手不得手がある。
従来の手書きの連絡帳	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者－教師間の心情的な交流に関する記述が多くみられる。 ○記述内容が多様である。 ○保護者や教師が、子どもに関して内省した内容が豊富である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○記述に時間がかかる。 ○動画・音声による伝達ができない。 ○情報の焦点化が困難である。 ○事実を伝達するための言葉（文字表現）に限界がある。 ○事実と解釈の記述内容が混在する。 ○発達記録、指導・支援記録としてあまり活用されていない。 ○記述者による内容の個人差がある。